

司式:西窪幸子
奏楽:山田絵里

賛美: こどもさんびか 114(『21』470「やさしい目が」)

前奏:「最愛のイエスよ、我らここに集いて」(J.S.バッハ)

子どもへの説教「イエスさまのいやし」 中川真明

招詞:子供たちを来させなさい。私のところに来るのを妨げてはならない。天の国はこの
ような者たちのものである。(マタ 19.14bcd)

おはようございます。今朝は児童・生徒の皆さん、保護者の方々、そして教会
員、求道者の方々、さらにライブ配信を通して多くの方々と共に、神さまに礼拝
をお献げすることができ、とても嬉しく思っています。

讃美歌:こどもさんびか 4(『21』6「つくりぬしを賛美します」)

短くメッセージをいたしますので一生懸命聞いてくださいね。

交読詩編 95. 1-3

私たちは『マルコによる福音書』を通してイエスさまと、お弟子たちの歩みに耳を
傾けて参りました。特にイエスさまが多くの方を癒されたお話を聞いて参りま
した。

01 主に向かって喜び歌おう。救いの岩に向かって喜びの叫びをあげよう。

02 御前に進み、感謝をささげ/樂の音に合わせて喜びの叫びをあげよう。

03 主は大いなる神/すべての神を超えて大いなる王。

今日の聖書箇所はゲネサレトというところでの話です。イエスさまはガリラヤ
地方においてかなりの有名人になっていました。ですからこのゲネサレトとい
う場所でも「イエスさまが来られた」という話はすぐに広がって、イエスさまの周りには多
くの人々が集まって来たのです。そしてイエスさまの助けを必要とする人々、つ
まり病気で苦しんでいたり、病気で悩んでいる人々が集まって来て、また「運ば
れて来た」わけです。「運ばれて来た」というのは、自分の力では歩くことができな
い、でもなんとかイエスさまに癒してもらいたい、そういう人々がいつぱいらし
かったわけです。それらの人々は家族あるいは近所の方の助けによってイエスさ
まの元に運ばれて来ました。それらの人々がどの程度イエスさまを信じていたの
かについては聖書には何も書かれていません。でもここに出てくる人々がイエ
スさまに心を開いていたこと、またイエスさまには病気を癒す力がある、そうい
うことを素直に受け止めていたってということがわかります。

朗読聖書:マルコによる福音書 6. 53-56

◆ゲネサレトで病人をいやす

53 こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いて舟をつないだ。

54 一行が舟から上がると、すぐに人々はイエスと知って、

55 その地方をくまなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床に
乗せて運び始めた。

56 村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を広場に置き、せめてその服の
すそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた。

祈禱

私たちを愛し、守ってくださる神さま。あなたは今日、私たちを教会に集めてく
ださいました。感謝いたします。

先週の日曜日から今日まで、あなたは私たちを守って下さいました。嬉しい
時も、悲しい時も、大変な時も、神さまはいつも一緒にいて下さいました。でも
そのことに気づけない時がたくさんありました。

私たちは、「神さまありがとうございます」と祈ることが少なかったです。赦してくだ
さい。

今日神さまは、私たち一人一人を呼んで下さいました。神さまに向かって祈
り、賛美の歌を歌い、神さまの御言葉を聞けることに感謝いたします。

私たちは今日、神さまを礼拝する恵みを頂いています。この恵みが私たちの
家族やお友だちにも与えられますように祈ります。

信濃町教会だけでなく、日本中、世界中にたくさんの教会があります。教会が
御言葉を伝えることができますように。

今日は、この後、教会学校教師任職式があります。吉田礼佳さんを仲間に加
えてください。感謝いたします。

教会が苦しんでいる人、困っている人、弱っている人と一緒に生きられるよう
にしてください。

神さま、平和をもたらしてください。一人一人の命が大切にされる世界にして
ください。

これから私たちは、中川真明さん、佃雅之牧師から神さまの御言葉を聞きま
す。どうかお二人を聖霊で満たしてください。そして私たちによく聞く耳を与え
てください。素直な心を与えてください。

私たちはいつも神さまの助けを必要としています。この祈りを主イエス・キリス
トの御名によって祈ります。アーメン。

これは実はとっても大切なことだと思います。以前のお話しの中で、屋根、天
井を剥がして病気の人を寝かせている床を下ろした人たちの話がありましたね。
それから、長い間、出血が止まらなかった女性がイエスさまの服に触れたとい
う話もありましたね。今回の聖書箇所にも、「せめてその服の裾にでも触れさせてほ
しいと願った」と書かれている箇所があります。いずれも「イエスさまなら何とかしてくだ
さる」という切羽詰まった気持ち、冀にもする思いがあったんじゃないかなと思
います。それがまず大切なことなんだと私は思います。

もう一つ、この場面で大事だと思うことがあります。以前イエスさまが 5000
人の人たちにパンと魚を分け与えてくださった奇蹟のお話をうかがいました。そ
の時にイエスさまは集まった人たちのことを、「飼い主のいない羊のような有様を深く
憐れまれた」(6:34)という記事がありました。今回のゲネサレトという場所も同じじ
やなかったのかな、と私は思います。多くの人々が飼い主のいない羊のように
イエスさまの周りに集まって来たことを、イエスさまは深く憐れまれて、集まって来
た人々に語り、多くの人々を癒されたんだと思います。

イエスさまの癒しは単に病気を治すことだけではありません。その人が社会に
復帰すること、新しい人生を歩み始めるようにすることがイエスさまによる「癒し」
なのです。

お祈りしましょう。天の父なる神さま、あなたの大いなる御名を賛美いたします。
どうぞ御国を来らせてください。

今日は子供たちから大人の方々まで共に集って全体礼拝を神さまにお献げ
することができましたことを心より感謝申し上げます。教会学校の歩みはとても
小さなものではありませんが、神さまが祝して下さい、福音の宣教のために生か
して下さいますように。

教会学校に繋がっている子供たち、保護者の方々の上に特別な御顧みをお祈りいたします。

今日は『イエスさまの癒し』について『マルコによる福音書』から聞きました。イエスさまを心から信じ、神さまのお導きに従い、神さまにお委ねする心を持つことができますように。神さまのご計画を信じ、希望を歩んでいくことができますように。

溢れる感謝と願いとを、主イエス・キリストの御名によってお献げいたします。アーメン。

説教「人々を主のもとへ」 佃 雅之

今日は今年度最初の全体礼拝です。いつもは別々の時間に礼拝を献げている私たちが、今日は一緒に神さまの御言葉を聞き、一緒に神さまを賛美しています。この礼拝堂には小さな子供から大人まで世代を超えて神さまに招かれた人たちが集まっています。私たちは神さまの前ではみんな神さまの子供たちです。世代を超えて共に礼拝を献げることは教会の大切な姿です。

今日、『マルコによる福音書』の御言葉を一緒に聞きました。イエスさまと弟子たちが、「湖を渡り、ゲネサレトという町に着いた」場面です。イエスさまが来られたと知った人々は町中を走り回って、病に苦しんでいる人たちをイエスさまのところへ連れて来ました。聖書には「床に乗せて運んだ」と書かれています。自分一人ではイエスさまの元へ行くことのできない人を、家族や友達が力を合わせて運んできたのです。

人々が集められた場所は「広場」だったと書かれています。聖書で「広場」は特別な意味を持っています。神さまは「広場」という場所のことを、預言者ゼカリヤを通してこのように教えておられます。

“エルサレムの広場には、再びおじいさんやおばあさんが座るようになる。”（ゼカ 8：4）長く生きて杖を手にして、静かに腰を下ろしている。そしてその町の広場には「男の子や女の子が溢れ、みんなが笑いながら元気に遊んでいる」（同5節）。

ゼカリヤは神さまが備えてくださる未来の姿を見ていました。そこには世代を超えて、全ての人が一緒に住み、喜びを分かち合う平和な社会が描かれています。神の民が長い間祈り続け、願い続けてきた姿です。そこには争いも、孤独も、恐れもありません。ただ神さまの平和と喜びが満ちている、これが、神さまが私たちに約束してくださる「広場」の姿です。今日この礼拝堂には、ゼカリヤが見た広場の姿が重なって見えます。

教会にもいろいろな人が集まって来ます。喜びをもってくる人、感謝をもって来る人もいます。辛いことがあって来る人もいます。悲しみや不安の中で来る人もいます。けれども、共通していることが一つあります。“みんなイエスさまの下へ集められている”ということです。

ゼカリヤが見た広場のように、教会の真ん中にはいつもイエスさまがいてくださいます。けれども、今日の箇所ではイエスさまは何もお話をされていません。弟子たちも何もしていません。聖書が伝えているのは、“人々が病の人をイエスさまの元へ運ぶ姿”です。

教会との出会いも同じです。家族に連れて来られた人、友だちに誘われて来た人、学校に通うようになって教会が身近になった人もいるでしょう。何かのきっかけで教会の門をくぐったという人もいます。自分の意思で教会に来たと思っている人もいるかもしれませんが、それぞれに違った道を通して私たちはここへ集められています。しかし振り返ると、“私は自分で来たと思っていたけれど、実は誰かに運ばれてきたのだ”ということに気づくのです。そしてその人たちの呼びかけや働きの後ろ

には、いつも神さまの導きがありました。

この箇所を丁寧に読んでいくと、もう一つ大切なことに気づかされます。それは、“病の人をイエスさまの元に運んできた人々は特別な人ではなかった”ということです。聖書をよく知っていた人ではありませんでした。信仰についてなんでも説明できる人ではありません。“この方なら助けてくださる”と信じて、イエスさまの下に運んだのです。

私たちはどうでしょうか？長く教会に通っているうちに、イエスさまのことをたくさん知ようになります。十字架の意味も復活の希望も知っています。『十字架』はイエスさまが私たちを最後まで愛し抜いてくださった徴です。『復活』とはどのような絶望の中にも神さまが新しい命を与えてくださるという希望です。けれども、いつの間にかイエスさまへの信頼や期待が薄れてしまうということはないでしょうか？

ゲネサレトの人々は奇蹟を見たことも、説教を聞いたこともありませんでした。信仰とは、神さまについて何でも知っていることではありません。“この方こそ、私の救い主だと気づいて、主の下へ近づくこと”です。病の人たちは、「せめてその服のすそにでも触れさせてください」と願いました。「触れた人は皆いやされました。」

服の裾に病を癒す力があつたわけではありません。その服を纏っておられたイエスさまが救い主であつたからです。ここで大切なことは、遠くから眺めていたのではなく、近づき手を伸ばしたことにあります。“この方なら助けてくださる”，そう信じ、近づき触れる、これが信仰の始まりです。

私たちも様々な重荷を抱えて生きています。病と向き合っている人、不安や悲しみを抱えている人、誰にも言えない苦しみを胸の奥にしまっている人もいます。けれども、今日の御言葉は“広場に集まりなさい”、“イエスさまの下へ来なさい”と私たちにも語りかけています。“もっと立派になってから来なさい”とイエスさまは仰っていません。“全てを理解してから来なさい”とも、お求めになられません。私たちはしばしば、“自分には相応しさが無い”と感じ、一步を踏み出すことを躊躇ってしまいます。しかしイエスさまは、弱さも迷いも抱えたままの私たちに、“そのままのあなたでわたしの元へ来なさい”と招いてくださっています。私たちも“イエスさま、助けてください”と主の下へ行けばいいのです。

今日の聖書には、自らイエスさまの下へ行くことができなかった人々を、イエスさまの下へ運ぶ人々の姿が丁寧に描かれていました。これは教会が今も受け継いでいる大切な働きを思い起こさせます。ゲネサレトの人々は町中を走り回り、病の人をイエスさまがおられる場所へと運びました。その人たちの名前は一人として記されていません。けれども、その人たちがいたから多くの人がイエスさまに出会うことができたのです。教会はこのような名もない人たちの祈りと、ささやかな愛の働きによって支えられているのです。

この信濃町教会の歴史も同じです。今月、教会は103回目の創立記念日を迎えました。100年以上に亘ってこの教会の歩みを繋いできたのは、人々を主の下へと運び続けた人たちがいたからです。名も残らない小さな働きの積み重ねによって続けてこられました。病で苦しむ人を訪ねた人、祈り続けた人、献金を献げた人、教会を掃除した人、一人一人を温かく迎えた人、名前は残っていないけれども、その一人一人の働きが教会を支えてきたのです。

信仰生活というのは、自分一人で頑張ることではありません。祈れない人のために祈る、礼拝へ来ることができない人を覚える、信仰から離れそうになっている人に寄り添う、教会とはそのように互いを支え合う神さまの家族です。私たちは時々自分の信仰は弱いと感じます。本当に苦しい時には、自分一人では

立ち上がれないことがあります。そんな時、“誰かが祈ってくれる”、“誰かが支えてくれる”、“また一緒に礼拝を献げましょう、教会で待っています”と声をかけ合う、それが教会です。そのために教会は今日も人々を主の下へ運ぶ働きを続けています。私たちには人を救うことはできません。人の心を変えることも、病を癒すこともできません。けれども、一つだけできることがあります。それは、人をイエスさまの下へ運ぶことです。家族を、友だちを、苦しんでいる人を、そして時には自分自身を主の下へ運ぶのです。その先は主が為さってくださいます。主が癒し、救ってくださいます。だから教会は今日も人々を主の下へ運び続けます。そして私たちもまた、その働きへと招かれているのです。

イエスさまは今日も私たちを招いておられます。“わたしの下へ来なさい。求めなさい。信じなさい。” 私たちがその招きに応じて主に近づく時、主は私たちに触れてくださいます。傷ついた心に触れ、弱った魂に触れ、私たちを新しくしてくださいます。礼拝の中心には、広場の真ん中には、いつも主イエスがおられます。そしてその主が私たちに触れてくださる。だから礼拝はいつも希望なのです。

お祈りをいたします。

愛する神さま、今日私たちをこの広場に集めてくださり、子供たちと一緒にあなたの御言葉を聞く恵みをありがとうございます。あなたはいつも私たちをイエスさまの下へと導いてくださいました。あなたの愛に感謝します。どうか私たちも誰かをイエスさまの下へ運ぶ者とならせてください。あなたが共にいますことに気づかせてください。いつもあなたに近づく心を与えてください。

この一週間も御言葉によって生かされ、主に触れられ、主に支えられながら歩むことができますように。

病の中にある方、悲しみの中にある方、悩みを抱えている方の上に、あなたの慰めと平安が豊かにありますように。

主イエスキリストの御名によって祈ります。アーメン。

讃美歌：こどもさんびか 135 (『21』 575「球根の中には」)

献金・感謝の讃美歌：65-2「今ささげる」

感謝の祈り：神さま、今日は礼拝に招いてくださってありがとうございます。みことばを感謝いたします。この一週間をイエスさまと共に歩ませてください。このお祈りをイエスさまのお名前をとおしておさげいたします。アーメン・ 主の祈り

派遣：讃美歌 89「共にいてください」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告：週報記載以外なし

後奏：「最愛のイエスよ、我らここに集いて」(M. レーガー)